尾張名所圖會 後編

四

第四門
第一號

購費番 一八二三 號
明治四十四年 月 日
品目 教學課
御中 教學課
御付所

教物品
教職員課
會計課

門 號
第 4
第 26
文 11

愛知県図書館

尾張名所圖會後編卷之四

目録

春日井郡下

上条狐乃神社　福嚴寺　曽呂利塚
勝川旗竿　勝川渡　勝川驛
小野道風出生地　大永寺　石山寺
山田次郎重忠　中將菊　羊神社
杉村　下方左近傳　矢田川
長母寺　小幡里　長慶寺
法輪寺　浈川神社　良福寺
機織池　毛受庄助　川島神社
龍泉寺　同裏山眺望圖　密藏院
神屋村　弥勒ヶ嶽　馬嘶石
名産奠茶　内々神社　内津山
盛禪和尚道德　大光寺　高牟神社
観音寺　守山里　大森寺
洞光院　篠木柏井　圓福寺
内津驛　玉野川

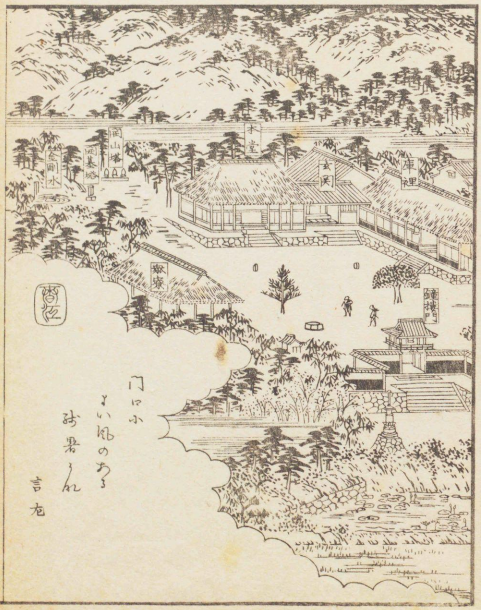
高藏寺　高藏社　鹿桑淵　宗良親王社
志談小僧　勝手明神社　當國山　金神社
慈應寺　磯村左近城址　尾張戸神社　東門ケ滝
眼鼻石　石樋　定光寺　兒岩
蛇ケ淵　品野村　品野焼陶器　菩提寺
祥雲寺　品野古城　岩屋堂　雲見ケ峯
三國嶺　雲興寺　苟篭岩　毘沙門峰
戸越　赤津焼陶器　大目神社　萬德寺
龍淵　屏風ケ滝　名産瀬戸磁器　藤四郎古窯址
藤四郎傳及肖像　新製漆有焼　六作十作の事　祖母懐土
古窯址　陶器土取場　信長公陶工證文ど賜ふ國
陶器製造の圖　陶祖春慶碑　深川神社　宝泉寺
瑞泰澄院

春日井郡下

伊多波刀神社　今八幡と称す　延喜神名式に伊多波刀神社本國帳に從
三位伊多波刀　一本四位下　天神と尺さる宮社あり本国帳集説に俗云
板鳴しかり
古板面画鳩獻神霊故為歟〻〻〻〻〻〻境内廣く一面の檜林にて
〻〻神さびさる猪地あり○末社　愛宕社　樂田社　田路社　天王社富士社　熊野社
建部社　神明社　山王社　天道社　秋葉社あり
例祭　八月十九日　原中到神無社　祭所　一座神あり　神木と奉仕　運神まし神あり　天赤
里長恵ある仕式終て流落る者東馬て多居久〻あり　真先に雄〻あり多くて其多
〻流落る三時無まりて春往〻神あるもの〻玄あり　其多り一の的まて神を祈念あり
次に流落るとあ後漢に走るものの事往解と　御旅所　神明社
一説にあり〻〻〻りの大祭会あり　あり
大叢山福嚴寺　大草村にあり曹洞宗大原派　備中国瀧木の僧性印和尚霊岳
走口國表村大同院末
和尚に隨ひ遠江國小趣〻〻〻ダ文安二乙丑年怪路の砂り西國野口村
小来り止り草庵を結び寓居す時に隣村大草の城主西尾式部道
永法下の道德と往ド一寺を創建して住持〻〻名づけ〻宝積寺と
〻〻遠江国周智郡の盛禪和尚〻〻の霊岳和尚小庵ひ家ヤ〻

ぢしゃうの
うれ
猛彦
やふるものハ
つつの母ようの
いきあるむ
おなじ
まふりの
神あるとしるべ
史輝

伊多波刀神社
三つてく
梅ふ茂うて
ひろうるゝ
ぬきしの文布


門に小
さい池のある
時雨ゝ亭
吉尤

福嚴寺
大叢村裏大叢山山孚仙陀松
擁閑苔蹊斗折楓林晩老僧初
共捲鴉還
小出聚齋
梅はひ山を
かゝめるこゝろ
若に訪ふ
みるの庵
嘉基

霊岳終りに臨く盛禅を傳て我附法の弟子性印尾張小わり汝行て
師と為し遺言あり乞れば則宝積寺に来り朝夕禁禅次文明二
年庚寅十二月廿八日性印遷化のち宝積寺にもり其地秋隠り
て衆徒と容ぐ乞れと患へければ西尾の小かくく大草山の西小
の地小禅刹を創く号し改て大叢山福厳寺と名つけ性印を
開山と盛禅を二世と為此人道徳殊小すぐれ来い其頃日郡
関田村に篠城宗八と云者あり強壮勇悍にして盗賊を業と為小
曽呂利と呼ぶ其黨類多く追剥をあり人殺すあるに延徳元年
の夏疫をやみて死も其黨の者共盛禅和尚を請じて棺を舁んとせし
青天俄小かき曇り遠雷漆の如く雷雨車軸を流く恐怖せぬ者
ありしに和尚炬を秉て一回相を示て曰三世諸仏亦如是歴代
祖師亦如是天下老和尚亦如是汝亦如是我亦如是棺を扣く其
三下して曰翡翠踏飜荷葉両鷺鷥衝破竹林烱烱れいち擡上に

穏坐して動ぜぬ時小京中に参りて曰極重悪人天将罰禅師不
許我空去と大笑一声あり天カくの如く晴り見聞る者嘆異
ひざるい奇し日域同上傳小あり 性印盛禅の徳小傳燈録小もあり
り小牧合戦の兵火小あり廃頽小及びを因応年周省和尚茅
舎とつくりもや旧貫小復せり○本尊聖観音木像座像 寺宝 性印盛禅
二世の画像西尾連永自ら図して讃を盛禅にあり其詞小 金剛井 山の半腹にあ
り武山れい
祖師の画像福地坐断乾坤西天東土盡是見孫しあり
小ぶ之しるしがあり盛禅ある夜山小入て座禅しけるに度の夜勝の下より清水湧出せり
名たりて井御しと号す其の因如しあり早魃なれば倒る年もあるとて今に為て人実
しるし 座禅櫻跡 名寺の一隅小あり今公小枯れ
和尚毎夜指て坐禅しに 曽呂利塚 回村にあり
名と為て近徒三年と代り知て法のあるの裏ある
つくりて京小ある篠堂於れしあるの後を京小近住せり公為邦と其子ありり
とりもて四里小近り出川村小あり住しつくりて花も延徳三年と天正十年に九十
低年ひとりれい宗八と知れし大名と又大名小 其頃まりつくり孫すと者数人あり
の為人今又一人の小ある名呂利 恵八 宗蔵 海右ありり其頃もあり世小出川村に住
くりり仏像を出川小奇宝もあり玉藻もあり白山の幸福もに太敵の剛力あり昔三人
ぐりり京八を鉞しひ伸ムるの命能紀に名呂利 毛鬚摩りるの為人しありもり
勝川旗竿 勝川村より数天正十三年 七夕の日竹伸の時 神君くに知り川の名と同のり
に勝川と云ふ 竹を伸り名吉地しに直小被竿ぬ

盛碑 和尚の道德火車の怪を退る図

和尚の道德八年文に曰く火車の怪と云ふ俗説ハ天正文禄慶長の間ハ諸方に多し予ハ武州豊島郡豊洞村の豊洞庵十世北高和尚と云ふ人学德全極の高僧にて火車の怪を退けりと云ふ火車萬一乃至数数にて今も什宝に成る一北越雪譜に云ふ共に怪所にて其ハ昔日密の長岡に降ること屢々見る所なり仲と雖ども鳥山石燕の百鬼夜行豫川春英の異魔新式可語と云ふ俗本に悪きを除火車の図に画き新板して悪せうまろ

まひしより今に到るまで此辺の竹を旗竿に用ゆる　甲申戦闘記に八日子の刻小牧山を御出馬ありて市之久田村豊場村あたり村を御通り彼陵の瀬勝川村へ御着陣此所にて悉く御馬を休めさせんとて又士長谷川甚助が家へ御成ありて甚助をめされ川の浅瀬地名を御尋ありけり甚助しかじか申上げれば勝利の名に吉兆を御祝ひし御湯漬を召して旗竿をも掲らひ御用意の竿を伐らせられ御物の具を此地にてかためさせられ御旗塚の上に御陣取を甚助に下されたり夫より小幡をさして進ませたまふ此時の御吉例により御旗竿を勝川村より奉る其川端に地名塚といふあり甚助の御旗竿は此地にて洗ひしにより今に到り其水を浸し封じ御を見んとする如く御軍勢を整へて小牧山とおのひちえの方にむかはせ給ひしかば当所の古塚に登らせ給ひ四方を見わたし給ひ軍のやうをうかがひて甲冑を着けさせ給ひしより鎧塚といひて今も古跡を存せり　甚助が志にて塚側の松塚などいふも此時より唱へしといひ伝へたり

勝川渡

同所の川筋にて御渡御ありし又此河原に瑪瑙を産す勝川瑪瑙とて名産とす　次雲根志に尾張国勝川瑪瑙をあげていふ此川上は玉野川にて種々の玉石を出す此ゆゑに此辺よりもかかる名石あるが好事者拾ひ得て賞翫す

牧山遺稿　渡勝川贈原三　國枝守義

春風別涙満衣冠　氷解平明勝水寒　莫怪故人腰下剣　中流自作二龍看　同

勝川驛

名古屋より内津池田などを経て木曽路及大井宿にわたる馬継にて是を下街道といふ旅舎酒肆多く賑はしき所也殊に春より夏にかけるのころは伊勢参宮先達に来るの旅人群をなし

朝宮山大光寺

上条村にあり天台宗比叡山田密蔵院末寺也昔は大伽藍の寺にて開基しいひ伝ふ七堂十二坊の大地なりしが連年の兵火にあひ天正年中長久手合戦の兵火にかかりて坊舎悉く焼亡せしを正保元年僧徒秀中再興せしとしち伝ふいまある十一面観音は行基の作にして当寺卅三観音の一所なり

内藏頭小野朝臣道風

同村の人群書類従の小野氏系図に敏達天皇七代の孫参議小野峯守長男筑前守葛絃の子とあり麒麟抄に道

風は尾張国上條にして生まれたり此人は右京大夫葛絃の子息なり嫡子道風次男元風三男伊風女子一人あり何れも手書なり其中に道風をもて第一とす云々と見えたり同書附録に道風寛平五年誕生　村上天皇康保三年十二月卒七十一歳従四位上木工頭内藏頭となれり性敏書を善くし日本三跡の一となる　醍醐天皇の時勅を奉じて紫宸殿の障子に額を書してより天下に名を知られる時道風と朝綱と書の甲乙を論じある人識して曰　主上の御判を賜りて互に勝劣を決せしとて御判を願ふに　主上朝綱が書道風に劣る事は譬へば道風朝綱が老に劣るがごとしと作られしとぞ　江談に見えたり　好古小録に道風朝臣白居易の詩をうつす模本一巻を見る絶妙二王の體を得たり奇世の珍なり真蹟何れの所に存するや道澄寺の鐘銘今伝へて大和国宇知郡榮山寺にあるのみ古今の碑銘其右に出るものを見ず又遊絲連綿草のめでたきは餘人望企て及ばんや実に良書といふべし世上に存る真

蹟拓本信用しがたきもの多し下馬札の書道風に称する俗説亦書記せる事もあり無稽の言と下馬の札は後世の制なるべき安禁破起帖しかく道風の假名にて群書一覧に帖の真本府下清光院に蔵を相伝ふ此地内裏頭巾風の書うつし明徴なし少も筆法のみるべく二王と攀つ卓絶倫なり春濤盍訛らざるべきなり扶桑略記に真蹟と唐園（渡されし年と載せ玉勝宮ふ安元二年　太上天皇五十の御賀ふ道風ふ献ける古今集と中宮の御方より奉らせ給ふまとあるべし又画も妙なりて皇朝名画拾景に多武峯護国院ふ蔵る大職冠の神像高野山ふ坂房にある弊至の像共道風の画く所なりと集古十種ふ真蹟の扁額数品を出せり今見る暑さり後に祈ふ祀り山城国葛地郡ふ也在松坂村とりり

大日本史曰道風善書遍勅神速延喜今古歴事　醍醐本紀村上三朝至四代に亡て道風雖書名加然　醍醐帝最愛其書及遣醍醐寺使道風書命楼一楼一枚初掲榜書南門道風大喜曰我之得意全在筆書矣　鼎又命書行草法社会一巻使傳寄走坊而但唐盍欲捕其美故其師弟詩宇宮門扁榜道風所書多勅撰歌志中風所書詩歌生寄體　鼎曰普恵橋直鉛書奉勅　村上帝書賀堂明命使傳火　宗編

寿昌山大永寺

大永寺村にあり普国院　村波国村室村国光寺共

建久元庚戌年齒戊羮地の頃を山田氏の祖建ふて寿昌院とゆひ一天台の古刹なり

無住国師道跡考に山田次郎重忠居本州香日井郡山田庄小鷹田後野建久八年三月重忠国先考重満十七回忌建寿昌院今大永寺是第天台宗なり

永正十七年庚辰の兵火ふ堂舎伽藍灰燼なりしを擅越山田氏の一族等これをなりて翌大永元年伽藍を再造して奮貴に復し

俗虎ふ大永ふ村大永ふ古寺の口碑なり川村の光国田谷

丹波の国光ちり柏牧和尚とはなして中興開山しし天台と改めて今代栄しし

その院号を山号しし年号としても号しし沢和尚い天文三甲午年九月晦寂十

遠州名勝志ふ　勅賜大永寺号と志ふりなりもの元し　同山栢悦道根和尚ふ天化知幻禅師の号と　勅諡しかしるの大徳ふれに奏聞　勅許を蒙て名付しら号あり　其上延暦寺貞観寺　嘉祥寺　勅許を蒙しり近世まてくる寛永寺ふりなりとつけしかいつまも　勅許の例あれなり

氏寄司村　或の寄統しもかし村　大永ふ村の古名く

左右口直鉛之政在吾不復問他　勅許寄国　九条書一行食字入競而承之不得者以為恥其為世貴如此鉛後世勅道風筆跡原依理藤原行成四三跡国　行成四三跡国とあるべくの相伝の筆書ふ左つ書ふ以ふ日部の古書に出ずれば元亡時代迄ふ文化十三年　五月伝村の隣村村代ふ村八幡社の後肉ふ也　此碑と建つ鉛久ふ　鉛久ふ　時代

大永寺

小野道風出生地

鶴髪僧歌
昔自松川出異才書
家三途獨居愁怒蛙
樂柳工夫長湯蠟道
風草聖閑下筆遒題
能得意寫經縑帛欲
成准帝称歳奏殊奇
絶避火時隨石古来

岡田謙之

ち頃天正の頃没収せらるる迄小堂の御立園田与七郎其子助右衛門与等之を
当寺の隆盛あらず天正十二年石門寺住雅公の勅願
を受け寺領を没収せられ一堂宇も衰廃せしと又長の末伊奈侍帝守
検地の時由緒正しき古寺なるにより寺領のうち若干を附
し岡田伊勢守も造営を加へ什物を寄附せしとなり東照宮
の寺社として又天満宮あり天満宮の社と境地の外にまりてともに
鎮守なり高さに岡田氏代々の往碑ある石美流樹樹の外に本尊
岡田伊勢守造営 来坊して寺紀陀なり 観音堂 本尊 釈迦の尊像 寺
同の往昔より 寺室 天満宮の一軸八幡公の自画賛あり此堂の杉物 修都作寺 ハ
に修りし 弥陀 寺 寺宝三天神の一人来に共誘ひ
伊勢守の寺宝三つ

西天山石山寺

天台宗西国第五院本尊元年中道四上人の開基なり
妙高山観音の像八畳四尺の作なり 近辺の石山寺の祝なり国宝なり
びに往へ 高さ尺を 慈覚大師 高さ三十三記寸の一所へ 住院に当る 八五院
なり 所謂石山寺無量寺 福田寺 光徳寺 光善寺 一旦荒廃して石山寺の名
田園の名 なり ぬ

高辛神社

同村ふるいなり 高辛 地なり 延喜神名式に高辛神社
ひとつ 高き 建れ なり 田 なり

本國帳に従三位高辛天神 一本四四位下 高見天神 と云なり

〇例祭 八月廿五日 神幸 ワ

山田次郎重忠

山田村の人。治石集に山田次郎重忠、義太の時若の浮ようて付き人々
[illegible]

中将萄

[illegible]

羊神社

[illegible]

國保山觀音寺

[illegible]

杉村

[illegible]

下方左近

[illegible]

矢田川

[illegible]

守山里

[illegible]

古蹟の道記

守山の里ハ名にのミきゝしに今見れバさらでも涙に袖をしほる　尊海僧正

霊鷲山長母寺（りやうじゆさんちやうぼじ）　山田村のうち木ケ崎にあり　臨済宗京都東福寺末　高倉帝の治承三己亥年山田次郎

源重忠其母の菩提のために建立し観勝法師をもて開山とす　ある説に父の為に長父寺とも建立せしが今ハ廃きて當寺のミ残れりといふ

もと天台の伽藍なりしが年を経て破壊せしを弘長三年無住大円國師当山に来住ありしより今の宗となる

無住国師道跡考に師諱ハ無住字ハ一円別に道暁と号す嘉禄二年丙戌十二月廿八日卯時相州鎌倉にて誕生す梶原景時の末裔なり父の憂に此故此里に生れける人ハ大果報の者なりと占ふ人ありと見えて養（きめ）られ暦仁元年十三歳寿福寺に入て壹役と称む仁治元年十五歳下野の伯母が許へ預られ同二年十六歳常州へ行て釈族に志ける寛元元年十八歳常州法喜にて剃度し一円と号す次大元此頃三井の名徳大半関東に住す師則三井の円幸教王坊法橋に就て倶舎論頌疏を聴受す寛元四年二十一歳法身坊上人に従て法華玄義と維問を此年剃度の師法音寺と譲る建長五年廿七歳師ありより三学兼備の志ある為に住坊となりて律院となし同年世良田の長楽寺に行て栄朝上人に就て釈論を聴採す建長六年廿八歳遁世の名となる建長七年廿九歳園城寺によりて実道坊上人に就て止観を稽ず次其より南都に行て五六年の間律学と禅次弘長元年三十五歳又関東へ下り寿福寺悲願長老の座下にて四字経をまつ座禅に志にあらぎ一年も満ざるに脚気（かつけ）の病起りて坐禅心に住せず次弘長二年三十六歳元来密教相伝の志ある為に和州菩提山に上りて密を学ぶ東寺三宝院一流の密相承く是と伝へ其る法相宗の法門も此時これを学べり其頃聖一国師東福寺に住して大に教外別伝の法雷を震ふ師則菩提山より直に東福へ往き国師と拝して天台の漢頂谷の合行秘密灌頂を伝へ大日経義釈菩提心論永嘉集宗鏡録等を学日夜鞭とうして教外の禅旨に参次弘長三年三十七歳本州木ケ崎

霊鷲山長母寺に来り住次弘安六年五十七歳沙石集十巻を著す弟子無尽道證これを受京都西方寺に於て梓行次此書今に至て盛に天下に行ける僧俗ともに写しもちる者多し此頃のまに天下の騒てありしかバ掃ニ正応年中萬歳楽とよぶして正月の初寿を祝ある詞物を作りし徳若とふ小者に授け家々に至りて歌ハしむ今にまで傳ふ其節の詞多く法華経と同ふ所謂狂言綺語の業となりて讃仏乗の因転法輪の縁となさんとのことはりとかや永仁三年六十九歳当寺山に上り加持土沙三斛三斗を取来り山内に散し布く此山に葬る所の亡者得脱の為なり正安元年七十四歳聖財集三巻長母寺にてこれを著す其後蓮華寺にして添削次今現に長母寺の蔵なり又去ありし正安二年七十五歳妻鏡一巻これを著す次嘉元三年満八十歳寺内金剛幢院に於て雑談集十巻これを華次弟子慈眼これを受て本州万徳寺にて梓行次師を無翁に譲り寺内桃尾軒に退隠し手自肖像をつくる（紙にて作りしを肖像に今伝ふ）次正和元年壬子八十七歳十月十日遺偈を述て曰一漚浮海八十七年　風休浪静　依旧湛然　と泊然として入定す　天文十五年大円国師と諡す

かくて在住のうち伊勢の桑名郡益田村の蓮華寺と兼帯して四十餘年住職のうち常に熱田宮を信じ数度参宮ありしかバ大神も師の道徳を仰ぎ給ひて五種の宝器を寄せられしが今ハ多く散失せしいと惜むべし其中の一品として唐躑躅（てきちよく）とよべる名木ありしを人は木ととりて庭前に植しに忽狂乱せしかバ元のごとく納めしよし因果物語にみえたり国師入定の後益繁栄して堂舎僧坊甍（いらか）をならべしが秀吉公に没収せられて足利織田家の寄附ありしも頽廃し纔に坊舎も

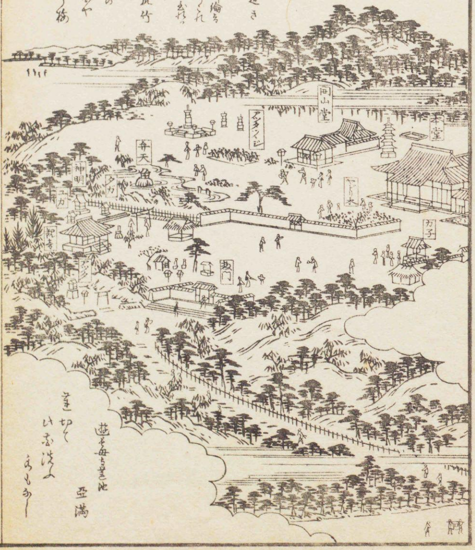
長母寺

金山稿　僧布毛
精舎府城北
三門驛路邊
開図千嶂秀
鳴玉片泉懸
彩壁映紅莿
浄池植白蓮
相逢如故舊
堪感宿因縁

嗚尻
長月ちりゆく吉根の重泉ちた
だひとつ道ありて秋の扱き
を訪ふ幽村の樹色とありけ水ヶ澄
の長母寺を訪ひぬ無住国師の廟を
亀澄と榜せし東雛峯をこめて
従ひ三径の蒐吟に入る南山の白雲
ゆりて両髙の洪眼に清しありひハ
紅樹山色と砕しの戒ひハ碧流
清緒をわりて舊蹤人なくして
らなり岡に隠てる松洞の裡山
川遠なく孤鳥雲をに落ちる
寒く近き峯の姿えなし見はらせ
先にて心なし半にまれそふる
昔とおりしき西風又伴苦吟身
と誦して寺にいらぬ隠士ハ
久しくありし人にとくもとなと
いひもられし床の上に硯のあり
それハ

風叩空門落葉寒
秋光眼霽水雲寛
世塵咄々答通腐
不牧不求心自安
天野信景

尚ちへ近き
後り
禁中より御論を
とし論せられ
無住の徳の誉れ
なおあり
尾張名所記　虎竹
岡山に
月向の
おや
もんし梅



遊長母寺途地　亞満
筆切て
川出き渋よ
ともなし

兵火ふせぎ大破に及びしを改秀寺の開山沢彦和尚来りて再興し其後又微々として衰へしを近世是鑑しふ僧来住し坊舎を営みしかやう田畑に復せし之祈岩山矢田川の中ほりてしりは川の外高ちの大門前を流れしが明和四年の山つなぐに岩山真中を押流して自然と川筋ありうちの流を流れ門前平沙となりさしは往昔小遠して一山多是左右にお對る○本尊 阿弥陀 俗に岡山観音と称し八回毎自作の伝説活の首像と安置し一勅願大田岡御の木像 **影堂** 亡父母の菩提を為に建立 **観音堂** 聖観音を安置 **宝篋印塔** 元禄九年 回忌の追善建立 **墓** 寺内に鑑真律師将来の佛舎利三粒を安置 **法華堂** 開山大和尚の住寺 **鎮守五社明神** 境内西の方にあり **熨田社** 門外西の方にあり大神垂迎の道徳と称し本地仏 **山神社** 辨財天社 **鐘楼** 寄生樹 中門に入て東の方に植ごとりあり此所の木やはり仏の化現なるべし 何の枝にも拾やうの木の葉と生じ又岩山の名木なりて名僧の名を伝へ名所の枝にも花咲ありて其馬と門前につなぐに彼馬 **寺室** 光殿司西の十六藤蔓とて一ツ岡山自筆の書類多あり其外諸家の諸世等迄

小幡里 ちいさい沼田尾張田あるも小沼田遠来とて二人の新族なり多く此国にありけり八人殺氏と尾張名族と賜り田積日本紀に天ちう日部小竹村名れど此所小竹村

来れり西所小の方の山寺に古塚多し

榮松山長慶寺 同村にあり臨済宗妙心寺末山田次郎重忠又母及兄の菩提の為に山田庵ノ為に開山ぜずず暴志ノ長慶寺と号す 庵のうちに三ツ寺とつくり長又ちそ母ちそ兄ちそ名付しが今又ちいそや今の文字に改りしが今の所ぞうりうん詳ならず

興舊山大森寺 大変対にあり 俗名 **寛永十一年二月十二日** 瑞竜院君の法号 **母歓喜院殿花林紅春禅定尼** 吉田氏女 **江戸**にて亡ぜりしが其菩提のために同十四年傳通院の境内に一宇の精舎を建立し歓喜院と名付けりと 寛文元年六月住僧大重信誉和尚今ハ亡りて此大岩村小うつ堂舎と営建し今れも多に改たれし梵刹なり

○**本尊** 阿弥陀 **常念佛堂** 本堂の東の方にあり 元禄三年 詩建立し不断念佛と称し詩ぞうとも七月廿三日永世迄略ちりしとあり 同君 **佛**

日山法輪寺 三甲午年 雲無ちの大雲和尚再建 一雲宇の寂蓮を開建 一善善山心法ちく名づけ曹同の法脈と伝ひて国仏のうちに同ちをいりて 慶ちりうりれが 寛永三年八月今の上元吉道尼の寄附 **教地文殊菩賢の三像** 仏師運慶の作 **次信忠信** 次孫の世尤湖深 **信忠**の母 **信忠**の妻 **信忠**の子 義任 義任同上に 怪仏所ちの合戦に軍功ありしを見小勝平三年三月十日八嘉 **義任**の夫先に ありし友 **信**

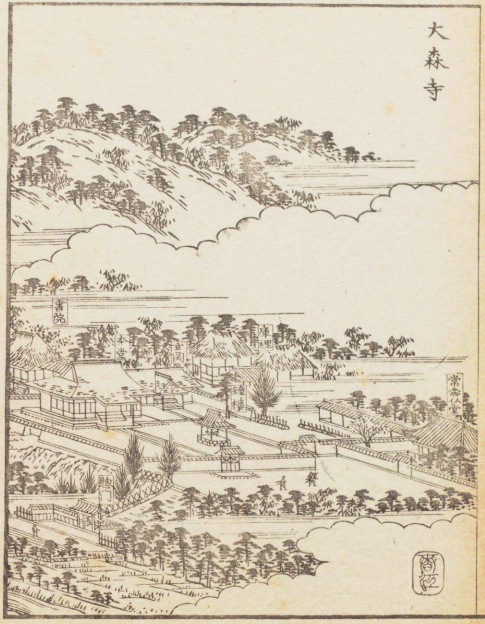
興福山深積
翠濃蘚然物
象感心賀古
墳猶見風雷
氣不怪當年
產巨龍

鈴木真庵

坊の花さくろ
吹くむ夕赤飯に
あの匂ひ
まかうりかり

至清堂

大森寺



二年四月十三日苦戦して義の為に命をおとしけれバ甚四郎悲歎にたへず尼となり二子が菩提のために
郷の佛閣灵地を拝まんとて登りけるが此正宗菴の尼僧に由りわりなくれば尋ね来りてやどりぬかくて
菴主の力をもかりて佛殿方丈庫裡山門等の修復を加へしぞさて尼も子細(?)にわかるる
三像とちらして本尊に安置し又定朝の刻める地蔵尊をも祀りて方丈に安置し兄弟の肖像を
彫らせて掌善掌悪の二童子に擬して地蔵の脇立とし次且灵牌を建て兄を吉祥院八過次信と
名づけ弟を清光院斂勝忠信と法号し永く追福の志を修せり又此寺年を経て頽敗に及ぶ事
もありしが後の料なりて黄金を地の下に埋め主なきの其悲の中に人にしらせぬ(?)文字と
きのしたる其文に以後為造立金子千枚此御寺牛刀二日置之也六月吉祥日とありて尼ハこと
隆実へりてのちに有ち碑とふて光明院玉華昌蓮と号す甚後年月を経て兵火にかかり
衰癈せしかば此時にあたりて村民心を合せ彼謎の文を考へ牛刀ハ丑寅二日ハ間の字の義を
ありとしちの丑寅の方の地を堀りかちて彼千枚の金をさぐりもとめけれども終に得ず
ふさ天文年中大雲和尚堂宇を再建しやゝ田畑に加へりしが天正年中ふたたび会戦の
兵火にかかり大破に及び経像もなくなりしを寛文年中澄然といふ僧村民とはかり村の南の方
今の地にうつし再建せしといふ貞享九年二月 国君より黄金若干を寄附ありしかば修補
其恩を謝し室蓋をも作りて本尊の頂に繋かけ又名古屋の士水谷某嗣信忠信の像を修飾し
荘厳をなせり播州明石郡奥畑村に住昔より佐藤庄司と名のる者ありて嗣信忠信の末
孫なりしとぞ此佐藤氏が家に尾張の大高村に彼兄弟の位牌木像のあるよし伝へ聞きて文政十年
三月書状をもて彼地より贈りしぞ真清田清田が御廟の尊霊年々の事を記して乞ひに境内に
古塚三つあり五輪也兄弟母の墓とあんじ寺宝に貞治年中書写の大般若六百巻あり
東遊記に奥州白河の城下より一里半南に乃川と云ふ駅あり此乃川の末寺福ちといへるに甲冑堂とて
甲冑の婦人長刀を持ちる木像二躯あるを
次信忠信二人の妻なりとぞありしとぞ

渋川神社 印場村にあり 延喜神名式に渋川神社本國帳に従三位渋川天神と
ある是なり 往古ハ今の地より十餘町北に渋川といふ所ありしとに鎮座

ありしを後今の地に移せりといへり大嘗會の齋場に祀りし社にて
村名もそれにちなめり 日本書紀に天渟中原瀛真人天皇五年九月丙戌神祇官奏曰爲新嘗卜國郡也齋忌齋忌此云踰既則尾張國山田郡次次此云須岐則丹波國訶沙郡並食卜 丹波の上の則字印行本日本紀になし今古写本によりてあらたむ なほ齋忌の斎場よりつけし村名なり
されバ御歳神大食津神大宮賣神等の御膳御酒などに関りあへる数神を配享せりむかしハ社地に境地廣く五
六町と隔たる所に斎居の跡ありて今ハ田となる又本社の後の方に古
塚あり其上に古甕ありて海潮のさし引に随ひて水の盈涸あるよし
いひしぞ今ハ絶えたり又直會殿の跡ハ今小祠と存して南の方庄中
村にあり近年あれはてて称し諸人崇敬し病者を祈るに必ず灵験あり
平癒せし後ハ其事をふれ通しかハ近くいふに及ハず遠境他國よりも来りて祈る
其祭田なり 天正十二年九月廿四日本多豊後守廣孝の制札あり

末社 天王社 白山社 諏訪社 愛宕社 多度社 山神社 八竜社 八幡社 一御前社 金神社 春日社 須原社 熱田社 熊野社 神明社 紅梅社 老松社

例祭 九月廿五日 馬の頭

萬安山良福寺 同村にあり 臨済宗京都妙心寺末 近濤院の久安年中開創といふ
後へ堂宇も荒廃せしが累年の兵乱に遭ひて零落に及びしを先
永八年未年名古屋政秀ちの槐山和尚 国祖君の命を奉じて再ちと中興す 槐山ハ丹羽郡
羽黒村の産にして梶原平三景時が廿九世の裔孫茂助景義の五男なり境内に養老泉とて灵

[illegible]

輝木山洞光院

新庄村にあり。[illegible]

寺宝

[illegible]

機織池

[illegible]

[illegible]

毛受庄助家跡

[illegible]

篠木柏井

[illegible]

川島神社

[illegible]

龍泉寺

遊龍泉寺
去年曾說看泉
寺今年思遊春
月天濃綠已雜
初夏景勝夢猶
帶暮春研不衝
老約看花伴却
愛同燒入鳴鶴
作夢山僧來致
意沙彌久爰賦
詩仙

陳元贇

遊松洞山

石逕盤旋草露濃
覓巢孤猿啼樹上
荷蕖魚子出雲間
磬音常响六時禮
風景偏攜一日閒
蓮漏漸催仲去處
漸逢清境向慶寒

機井主明

僧玄潮

圓通三昧夢驚覺曉天鶴
昨夜千峯雪今朝高樹花

秋の風　少魂

中如色四五村の在りあり和名抄
みて及てもに伊予国
吉郷村にあり天台宗
社田寄慈院志

松洞山龍泉寺

延暦年中傳教大師奏田宮に
参詣して修法わりしかわる択童女一人来り大師に逢て昔し日
是より東北に当る地に童泉あり我に其池に往童女なる師の
法恩とりけく永く無生を證せん思ふ願くは我為に一妙なる
志めしをかりもて俄急然として忽ちなる大師其意を
ひしまに跡を尋て当山に到りに山の西南に池あり其中より
俄小浪を起し童女出現して大師に向ひ前の日熱田にて蒙り
まいせしに今日こそも尋来りまつる事疑なるに多年此上は
我累劫の苦患を救い給へ清しかば大師則法華一實の妙音と
授けたまへば童女悦ぶすがたりうく今より後旱魃あらば如甘
雨を降して普く人民を救へと誓ひ終りて池に入ぬ其池を多
羅ヶ池と云ふ初池中より圓浮檀金の馬頭観音の尊像涌出して

側に椎の木の横に横たはりて大師感喜の思ひとの茅堂とい
へるに其像を安置せしとて紀祢ぬ本尊と造立
一夜のうちに尾張国竜山寺に飛去り一夜の内に
沙石集に尾張国竜山寺に
一夜のうちにつくりて飛去り
竜神感ずと
現して造立
木尊を崇め竜泉寺と名づく
其後弘法大師奏田の神宮寺にて本地供
と百ヶ日修しけるに日毎一人の童子来りて樒と閼伽の水とを奉る
大師あやしみて来る方を問へと凡遠くは山の禁庫ヶ多羅ヶが
池に入ぬ大師ふかく重仰なりて其年とはり夫より結願のあ
りしは山に十坊を建立し彼観音の金像と供養し結願の日奏田の
榊を折来りて堂の南に植ゑ榊葉の枝葉茂りて今に迷はり此所に当ると傳教弘法大師の開基
と云へ今百五の夏ふりとしるしい四月五日と七月六日とは山に
詣る者はいとふ弘法大師の主行なるとのあり今当山四観寺

龍泉寺
裏坂の
眺望

四ノ十八

遊龍泉寺

古石磐若細逕長白賓高
擎地王鄉閑僧一鉢一瓶
句拠佛三十三處管王畔
清流分瓜脈金城ヶ眼界
輝光此開闢說稱松洞即
鹿夜樣流聚蓋

村田梅邨

なつかしき
ふるさとの山
雲者乃夢と
下ふすうん
李白

山ヤまはるんと
それハ夕ぐれ　白圃
いけしらう一日
三十五ノ村　梅屋

のうちに列し三十三観音の一所なり中昔より多く此兵火にかゝり
天正十二年長久手合戦の時秀吉公の軍卒殿堂を焼しかバ什宝
旧記ことごとく焼失しけるを慶長三戊戌年秀純和尚再興し本堂
二王門多宝塔を造立しありしに倍して繁昌の霊地と
なりぬ殊に近年ハ開運厄除の守札と施与す正月十八日又節分
の日などハ諸人群集して札守を受る幾千人といふ数を志らず

○本尊 馬頭観音ハ上にしるすがごとく九江の滌濤ありくハしく其説ハ周防国の地名にもあり海邦名勝志にたらゝとかけり考ふべし

椎木 上にありむかし本尊観世音此木の上に影向ありしより古跡なれども中世枯木しつひに今ハ其跡のみのこれり

多羅々が池 山内にありたらゝの名義解しがたし たらゝと譯り侍へしや たらゝが池の例にありむかし

榊木 堂の前にありむかし弘法大師晨中日参の時此木に杖を立かけられしよりつひに杖となりしと天和年中の暴風にて倒れしと今ハ名のみ残れり

西国三十三所観音堂 近年の建立にて山内所々に小堂といふありかはりに参詣多く此堂を巡拝する者少からず

当山ハ勝川の流に傍る山岸にて書院及び本堂の後なる裏山より
西北の眺望いふばかりなく西に金鱗の光かゞやかして小牧山尾張不二
本宮山ハさしく尾州とさしめ近江の連山波濤をなしきらくハ摂川の緑

水清冷りて曠野の平遠なる篠原の村落并面に石を下せるがごとく寸馬
豆人の往来ふさがるまで風光他に勝りて実に摂東第一の絶景雅俗の流
をまなこの勝地也志りのくおもし此山ハ竜の尾山とて和歌の名所也

あやしくもしつれやくらん竜の尾山の夕立の空　衣笠内大臣

天太抄
雲晴ぬ竜の尾山のたかきに浪をかけて鳴るさゝなみ　源仲正

塩尻に竜の尾山ハ衣笠の大臣の和歌に出まりけるも世にひろくしらざるハ口をし天正十二年の夏豊臣秀吉の陣所となりしとかくまさゝハさもそハさりげしかれども物かハり星うつりて汗馬我夜の帰さなくむかし寒月辺城の暮関河古塞の秋むかし語りとなりぬわれむかし人のまゝくハ竜の尾山の志られざりしもをしむべし

醫王山薬師寺密蔵院 池田村にあり天台宗 山城国延暦寺末 開山慈妙上人ハ常陸国神田荘の
住人廉島氏の子なりしが家の後伊勢大神宮に詣で仏法弘通の勝
地を得ん事を祈る千日にいたり参籠したれバ大神其志を哀とや
思召けん異夢を以て妙なる白珠一顆を上人に授け給ひ且其ち院を営む
づき勝地を教へさしめ給ひぬかくて此里の者男女数人の夢に牧方の
穢手毎に炬を持天地を照して夜に来る事ありしが火災のさとしうるふ

密藏院

暮春経龍泉寺至野田密藏院途中口號

院内堂壁有記壬寅年數子来游者余亦其一人也餘皆帰泉下僅存者余与蘭皐而已可不慨然乎因句中謂之云

崑玉集

千禺臣

乗霽行尋古佛樓
籠霞樹傍遠村幽
江頭置酒寛愁抱
壁上留題悲昔游
九折阪連青草渡
二川水合白鷗洲
将残生陏風光去
春老芳菲何處求

ことやあらんと怪しみおそろしく事限りなし或僧は是を考へ解きて諸人に告て猿ハ山王権現の使者姫ハ般若の智火なれバ必天台の高僧来りて衆生の迷闇を照すべしといひ居られしが慈妙上人 大神宮の示現によりて此村に来りたれバすなハち大徳の至れるなりとさしもうたがひし人々も悦びあへりかくて嘉暦三戊辰年当寺を建立し七堂伽藍を営まれし上寺傳及び三国傳記本朝高僧傳等に見えたり抑遠近諸国の僧侶来りて慈妙の法を受る者日々に多く尾張美濃三河遠江駿河信濃飛騨伊勢攝津肥後および西国の土地に末寺を建て当寺の指揮をうけ来りしが中昔の乱世より音信通ひがたく遠国の末寺断絶しけりしかれど尾濃のうちにてハ当寺の流下に属して末寺となる寺院今猶百を越えたり抑当寺の傳法ハ兼上派或ハ篠木流と称する事ハ慈妙上人京都建仁寺の兼上僧正号栄西国師の傳と因頭房尊辨に受て禅密兼学の一流当寺の開檀と成し給ふ栄西ハはじめ比叡山にありて顕密の二乗をきわめ後に一流を立て衆徒を教諭し兼上流と名づく当寺其規法を傳へし所なり其後中興珎祐権僧正の時より東照宮の別当職を兼帯しありて尊寿院に住し当寺にハ代僧をおきて寺務を監せしむ

○本尊 薬師如来ハ内陣に阿弥陀の木像なり共に霊佛なり

如法院 元三大師堂を称し慈恵僧正自作の真像を安置す元禄元戊辰年より公の御許を得て名古屋天台宗の八ケ寺にうつし一ケ月ツヽ寺々を巡らし佛物を拝ましめ行法を修し国家の安全を祈り衆生済度の結縁とせり次に江戸東叡山元三大師の像を月毎に臨寺を建て山内の寺々にむる供行法を勤る例にならへり

灌頂堂 慈覚大師の刻める大日如来の像を安置す近国末寺の僧徒此寺に来りて灌頂受戒をうく

経蔵古跡 むかし顕密の経典を納めありしが乱世に廃絶し経巻も失せて今ハたゞ其跡のミ残れり

開山松 松樹のもとに慈妙上人の墓ありとあさりし所かく騒くとりゐ

灌頂井 当郡神領村の慈妙院と俗に当寺の奥院とよぶ所に灌頂井といふありむかし慈妙上人此院に灌頂受戒を授けし時浄水乏しかりしかバ加持密呪を誦し獨鈷をもて地をうがつに忽ち清泉湧出しけり即汲ミて瓶水に充らるしかるに中むかし慈妙院派を改て修験の住持となりしが当寺に一井をうがちて彼獨鈷水の代りに用ひ旧名ありてかく名づけしとぞ其外慈妙院に影向石といふ岩あり形状めづらし慈妙上人弁天供を修したまひければ弁財天女此石上に影向ありしといひ伝へより

寺宝 後伏見帝勅筆扁額一箇 同宸翰一通 同院宣一通 十六羅漢画像一幅 獅子香炉一箇 花鳥金屏風一雙以上の数品ハ後伏見帝御あつかひの時慈妙上人に勅して祈祷ありしかバ賜ひし浄病息平愈ましゝ浄悦びのあまり慈覚院とふ額を浄慮手ありて下したまひしとぞ又金屏風一双 袈裟衣二領 念珠一連 恵恭の阿弥陀 金剛華の釈迦文殊普賢像 慈覚大師本の弥陀釈迦勢至 其外仏舎利 金胎両部曼陀羅 灌頂法器具等あり 大猷院殿の御法華を当寺にて御執行ありし御寄附ありし宝物など其外多く挙てつくしがたし

塔頭 むかしハ三十六坊ありしが乱世に廃絶して今わづかに五院と称す吉祥坊常林坊善明坊常泉坊福泉坊なり

勝嶽山圓福寺

白山村ふるり天台宗神田寺義花寺むー伊勢国門徒浦小孟真ー
るくりくりくり諸国ふ所ふくしく色とよりまり寛七癸卯年四月吉岡
下津の漁船に附ー京都蓮宗より東の方と守ー又まで内津山の禁籠の色に帰ーさて主
て五色の光り光に光ふりくり孟真主ー真の現ひをりー其所を弁色の光りを遂て比比ふ
寄うに内の弁ーの松島ーて上面観世音の真像を浮ーり孟真ーよりくり波像をふの白
てなふ何賀に帰ーるる漆塗ーうて其ふ当にまりて孟真ーよりくり波像をふの白
くて勅ー仏像孟真ふくれし其ふ小紀ふりくり家に紀ふ家ふ衣の伊基
てまに光華を地蔵ふに若ぐ我ふ小ふの紀島ふ三世法仏の勅ー法生を現ふ小仏
地ふりまりと仏我と他境ふ遷ふんふりやすやーふ国にふ人ふ
りねふ尾ふふくてくくふ紀島のふりに三間四面の堂とくくくくふ波像と安置ーけれ
を堂の乃仏ふ光ふ行ー真ふ村にふりくくふ像ふもくくくけーふ外ふ小ふ真ふ
寄うて志浦寺ふ大文字の面頭をふくくくふ拝けーふ今九文字に改めーふて文字
直行ー基ー義と清ーて供ふの改ーけーふもりくくふ真ふくくくくふ
法世密ふ世三記ふのくくふに列七寺宗ふ太鼓ふくくくふ時ふ大ふくくくふ里ふ名ふ人ふ
ふ呂利宗八陣ふ鼓ふくくふ倒ふ白山ふ村ふくくふ古鼓ふふ村名ふ古鼓

神屋村

ふ奉ーふ村ふ三代年ふ浦ふ後ふ山ふ村ふ惜ふ
むー日本武ふ陳伯の西略内津ふ山ふ上ふ浦ふ
ふの通ふふくくふ村ふ神ふ名ふ名ふけーふ山ふ伝ふ真村明知ふ
ふくふふ近ふくくふ日本武ふ
ふくくふ

弥勒ふ嶺

ふ平ふ村ふ近ふ村ふ名ふにふ美濃の可児郡世保村ふ後ふ山ふ林ふ
ふくくふ山ふ下ふ山ふ平ふ村ふ弥勒ふ山ふ行ふ村ふ山ふ横ふにふ名ふ
ふ

馬帰石

西尾村ふ内津社ふ一ふ庄ふ上馬ふ蹄ふ跡ふ
日本武ふ馬ふ乗ふ
今天王社ふ
ふくくふ

内津驛（うつつ） 名古屋より中山道へ出る宿駅まで下街道といふ善光寺の可児郡池田村に通ずる諸侯方参府にあらて常に旅人絶ず往かしき里也

名産煎茶 内津の山間及び近村にて作る毎歳卯月の頃つみて出すを当所の茶師買取て精製し諸方へ出す宇治信楽にもおとらず茶の湯にも用ゆべきよしき品なりと尾張人いふ 其うら老松といへるハ国君の名付させ給ふ所梅咲山といへる九條家の御染筆なりといへり又手枕といふ也有翁の銘なりとぞ

霊山出芳茗　風味勝瓊漿　午睡抛肱處　偏憐蟹眼香　松平君山

内々神社（うつつのじんじや） 同村にあり今妙見社と称す 延喜神名式に春日部郡内々神社本國帳に正三位内々天神とある官社なり集説に今録天神在春日部郡是也小豊子建稲種命廟祠也とあるがごとく此命を祀る社なり寛平の熱田縁起に日本武尊還向尾張到篠城進食之間稲種公傔従久米八腹策駿馬馳来啓曰稲種公入海亡没 日本武尊乍聞悲泣曰現哉現哉 因現哉之詞其地号内津社今称天神在春日部郡 とあれバ建稲種命駿河の海にてみさごを捕んとて遂に海に入失給ひしとぞ されバ此命の祠と建られしが中世妙見寺祭祀を掌りしより混一して稲種命社とは称せず妙見社とのみいひならはしけり 其妙見菩薩ハ大留村

にありしをこゝにうつせるなりともいひつたへて彼村に元妙見といふ地ありしかど今ハその頃の事も定かならずとぞ 妙見菩薩の事ハ七佛説神呪経にのせて北辰の名なりしとぞ普く諸国に勅して祭らしめたまひき特に伊勢国山田郡の妙見の類ひ今猶多く此地にも祭りしを本地垂跡といへる事より妙見を建稲種命の本地といひならはしけるなり かくて天正三年烏有に帰して社記悉く亡びしかバ知らぬ名を称するもしるべなり社の上なる山に奥の院といへるありて当社開闢の地といひならはせる岩窟あり其深さ二間ばかり其中に小祠あり是また建稲種命を祭る又岩上に岩窟あり深さ八九尺常に清泉涌出す 此水潮の満干に随ひて増減す 凡当社の神饌ハこれをもて調ずといふ俗に御塩水と称す故にこの所道路ハ大石を重ねて壇とし甚けはしくして登るにたやすからず又天狗岩といへるハ高数十丈天に聳えたる如く奇状なり一の鳥居ハ社頭より十余町南の方西尾村の地境にありしが享保年中焼失して今ハ古跡のみ存せり 一説に日本武尊の現哉と宣ひし地ハこゝにあらず隣村西尾の戌亥の方の山に旧跡ありて今山王権現を祭り古妙見といひならへりとぞ甚是非ハ詳ならず 例祭 八月十五日車楽を出し神輿渡御の行粧あり此也の大祭にて大に賑合ふ 別當妙見寺 天台宗にして池田密蔵院末

四ノ廿四

内内神社

榮樹門巒豐險巘風撥雷霧
送朝曦南闊北望天察廊
山水一奇雲一奇

細野忠陳

むらくもの山ゐ
わたれても
ふるくハもとに
もとのくもかな

中尾義楷

内津山

当村ハ田島より山嶽のうちにて当所その高山之東北ハ可児郡池田村にて其所にハ青峰日々多く此山より夕嵐吹日多く其日ハ天快晴する故甲人の諺に池田の朝霧内津の夕嵐といひならはせり又隣村外原山ハ此山と山脈つゞき当所までの添山にて殊に麻ふ多く山間の田畠にハ悉く麻陰の境ども村落も頗る幽棲なり外原山より秋冬の頃毎晩風起りて東北より吹おろし流れり未明に風止めバかならず此日面倍る此風をとらへて晴雨を占ふといふ是又里諺に外原の松風といひならひし池田内津の朝霧夕嵐に対するなり

玉野川

玉野村の南定光寺の本堂山に接し水源ハ美濃の土岐川西沢川落合十三峠の谷々日吉川などひとつにあつまりて水北川東より合流し当郡中を経て下流ハ愛知郡海東郡の境を流れて海に入る

此川無量の白石水中に出没し巨巌山を擁して断岸に崎ち老松枝を倒にして絶壁に聳え激湍石に噴して白雪とならべし清流砂を帯びて練とゝもながめ水の甘きハ茶を煮るによろしく石の坦るハ穏坐を兼るに堪たり山の間に傍ふて列なる百千の松を載せて究も翠幌を展るがごとく実に山水の奇観至れり其の美濃の金竜道人ハ山水の癖ある人にて天下に周遊しあまた佳境勝地ども探討せしが此玉野の奇観をもて山水冠天下と歎賞せしもまで山水の奇絶想像もつくしがたし初夏の杜鵑花暮秋の紅葉山に映じ水に醮するさま又十倍の風光なり

遊玉野

千村伯就

東極山東玉野辺　放遨携侶出塵纏
奇巌競秀浮雲外　逆水争流怪石前
嘯遨情堪志本末　採樵翁話換神仙
如斯佳境三飡罷　自覚帰家腹果然

玉野のやさしを見るに（枇杷園句集）弥よりて佛ときを用ゆ次第の樹に帰りの見にむかふ春いろ是る淋しからんされど弥ハ一ぷして用ハ百千ぷ見る百千ぷ拾ふ人拾身しぶ其況や一ぷ拾ふ人をや世のうれよりハ従ふりうと侍る人やあんちいきれ松の菴に文机の外みるかのうくかまそうに用しきあしする傍のけうるの茶を煮るいろる人にて俣せかまをて問へとおんくるのとまてわのもいとほしやまし花栖れとを此石に尻かけく

花のまゝこれらも善の筋さるや　士朗

いとおかしうろうかうや如何ぬと見ハわれかまへてかさねうたすけ傍の戸をさしこめるこそいとしうろうハ麻しけるに日ハ西の山にかくれてみるこの言に擁きしく小舎の山れきてき水の香にそありける

擁鶏やあか川ゝあくもほまきぬ　仝

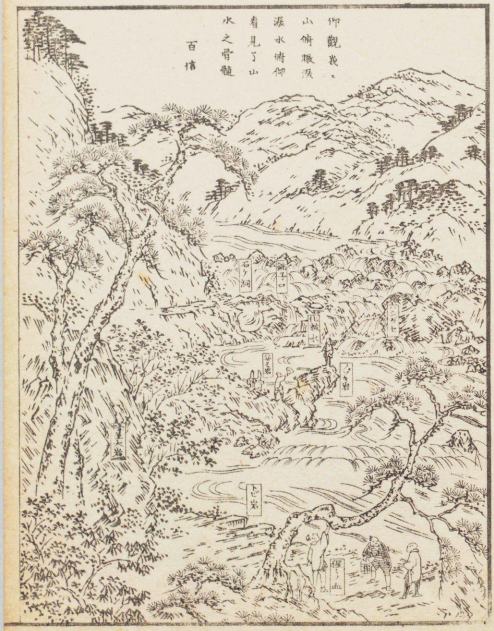
とはまさしけるハかの傍此に来りて茶のよく炭一ゝ傍らに志りしとておくられるいとうれしくて立入ぬ

燈明山高蔵寺

高蔵寺村にあり天台宗比四村密蔵院末開創年月詳ならず応永十七庚午年傳云中興せり本尊薬師如来ハ玉野川の深淵より白き麻に包みて上りませるを奇縁として其淵より竜燈を献じ山号是に起れり則其淵を慶が淵と名づく往古十二坊ありしが永禄の乱にかかり堂塔僧坊悉く灰燼となり実相坊一宇残りて今の寺これなり其余の十一坊ハ一山のうち所々に古跡を存じ今は田畠となりて法守山王社金毘羅社観音堂あり又寺室に各名利忠八の刀あり

王野川
高岩
小屏風岩
四ノ九六

戊戌八月廿一日同
春江梅雨趨了王野
雨山相對而高僧
潤水下其間是王野
川也潤水深碧而蒼
宜樓飛蛇長廊縈繞
可以游而清堪遊覽
驚美山水之奇絶幾
駭人目也歟之奇小
詩十五章聊以形容
爲然何足以盡數千
山雲水伯手缺
秋光增我逸興
遠且秋且吟倉
秋詩行到屏風
疊下看山遊興
奇水絶奇
西海


仰觀義。
山脚職須
源水脚御
看見了山
水之骨髓
百情

其二
峰屋大岩くり
横ゝ湖に切ゝ

水忙而石靜
石默水遠吟
如斯水石美
枕漱信吾心
百信

其三
四ノ九八

高蔵社 同村山の頂上にあり願ひ旧記にて慶安四乙未年再建あり俗に安田高蔵宮の奥院といへり 末社 山神社 天王社あり 例祭三月三日 祠官水野氏

鹿乗が淵 同村にあり玉野川の下流にて奇石怪巌多し中にも入尾の淵より獅子岩まで其間中に石あり白砂の縮流あるは轆轤に旋して彩庭に四方を生着するさへ更に別趣の風景所謂別天地にいるの心地せり奇観何とも目を驚かし魂を奪ふばかりなり

鹿乗といへる地あり川の流山のたたずまひ其景年〻にうしさし当所のさま殊に風流の地なれどもまた流東より流れて水は白練の糸を引くが如く怪巌奇石或は欹ち或は傾き或は偃伏し此内数尺のものは其様くのものに似て兜岩茶臼岩太鼓岩獅子岩などいふものは皆古人の名付るなりと又汀の砂の白き美にはまがふばかり日かげに映じて玉の光輝あるに等し意は坡翁が赤壁に游びしおもひ杖を投て虎豹に踞し眼をかけて千尺の断岸に対するにあって暫時帰ることを忘るばかりなり畸中の景をとりて悪詩を口号む人のゆんも乃猿痛くや

一帯清河旋レ麓流 怪巌奇石延鄙洲 鶴思盧岳湟川 地漏在二海東山下頭一

川とともに流れて山の林藤を東へ歩む千様の楓樹の紅葉を接て秋葉暮を漏き淡きをそそぎて折しも今ぞ紅葉の秋のあらし妻ひて康の暁の鳴音も哀れなる此地のおもしろきに

かりはおもしろの山つるしまる紫かくれの谷はしきな　清園

鹿乗潭

赤壁丹崖勢自孤 曽従二水府一現二金軀一 龍燈半夜猶明 滅鹿馭千年更有無 怪石生レ光留二玉検一 澄潭倒レ影湛二氷壺一 高秋頗覚宜二登渉一 莫レ笑狂吟膽氣粗　岡田新川

中務卿宗良親王社 下大留村産神内宮神明社の境社にあり相伝ふ当社の祠官水野氏は宇止奥令の末裔にて当所の人なるが尾張負忌の代南朝に

仕へ官軍に属して数度の軍功あり応安年中親王の供奉して当所に来り此所に滞留し親王もここに終りたまひしより往古は王留と村名を唱しと今に男孫玄孫其子孫親王と崇めて白日霊社ととなへり先年府下の處士清水将作成利といへる人楠家の末孫なりとて服部一腰を奉納し今に神宝とす成利は九老尚歯会に撰まれし一人にて故ありて浪虎に中務宗良親王の御集李花集といへるを載場にかけりしを読まれしいまだ世のうつりかはりに行ひとしらんすまひの余りにせは遠江国に久しく住給ひて今は都のまなりもいつまれ果ぬるのちぞ身の沈むさまいとにのこりさりけり侍りて猶東の軍の空なるなど語りしも我ならぬさにおもひて侍りければよそにも侍りし次に思ひやりにあはれなり侍らおもふし我身とも思ひそめよかし猶とてに宗良親王といふ遠江国井伊谷にありて其後駿河国田中にましけるが正平八年二月新田武蔵守大江田武部太輔上杉民部大輔など親王を奉じて新葉集ならびに征東将軍と称し李花集に兵士二萬ばかりを従ひなりけるとぞとよかけるごとく当国及び関東に多くましまして生涯武事にたずさはりてまれ親王となりたる山中の小社が此親王をいつき奉る事もそれとも覚え侍る

志談小僧 上志段味村久峯寺といふる曹洞の住僧にて中むかしの人なりしが強力にて大石を擲ちければ時人志談小僧と唱けるとぞ甚だ撥しといふ大石今猶彼寺にあり

勝手明神社 同村にありむかし当郷の瀧氏乱をさけて此村にありしが吉田の勝手の神を勧請してここに祀りしとなりしが廃して石の小祠のみ存せり老樹ありて大竹生じて此辺の里人勝手の名によりて旗竿を切出しも今は此辺も少なし和名抄に志談とあるは志談の誤字なりといふ又当国山の麓に石窟の跡ありて神代の人の住し石穴のよしいひ伝へたれど古墳の石棺のあとげなるらん

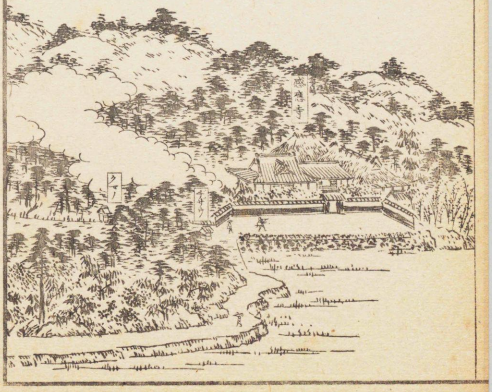
當國山 下水野村にあり尾張戸の神の鎮りまし山なれば尾張山といひしとかや昔にてのちには東谷なりとぞ又かさねなる山の麓志段味村の方に石窟あるも尾張氏の古墳の年を経てあらはれたるなるべし此山は雌松のみ翁鬱として聳える峻嶺なるが山の北裏水野川に臨める地に楓樹数株ありて晩秋の奇観錦繍をさらすがごとし

跋渉山川水
来遊玉野川
山水之奇絶
況病頓覺癒
百信

玉野川下流
鹿兼淵
大鮫里
御子ヶ瀬上

尾張戸神社
當國山
二村貞房

金神社
藏應寺
磯村左近城址



金神社　上総国村の一ツ小金山ありて今白山と称伝延喜神名式に山田郡金神社本国帳に從三位金天神と云ふる官社なり此神の称号なる所に由も今と昔の異なる事紀の天孫本紀に見へる天香語山命
十五世の孫尾張連金連なり云々

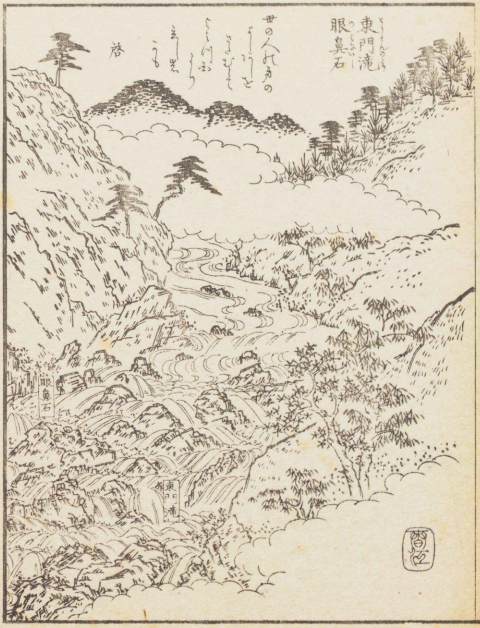
小金山威應寺　因所に有り陸南宗　曹洞村宝光寺末　寺僧も宇〻〻〻〻を元禄の頃の住僧薫

開梨古き木牌一枚どこ〻〻に落ちる行基井開基は行基

でけ〻〻て開山の名を知る甚頃如得子が書る開山木牌記に詳

〻〻〻〻

高松の
ゆの
いろに
なるまで
年ふる
しの
かずさ
鈴井正枝
高松山


東門滝
眼鼻石
世の人れ者の
ゆいとて
ながしけむ
えにしも
滝
眼鼻石
東門滝

石樋

上水は村樋に流れわり
け付のうち在る間天竺四
雅ふ池の面沈うあせ
川ふ流る四流は平と
鳴くに大鷲石の
電ふ樋の
めぐる
陰ミ
いろく
人ふるくら
えりかめ一四上を
流うしあるふ
ふるをかぐし
ふ石又ふ一勝
系みう

みりしつまし
ふけりき清つせの
底きあをいろよ
せくえく
あをあをあるあれし
石しうゐ此の流のつとれい
ふ帝ふかりあるの系
いくあもう流くうの底えれ
しりつけ石をすくうくうる
ふてえきい石もにと撃へく
流まるくくもくわりて
このうし若て高
ゆくしうあひりきに冬の陽の
光かりきふるをきこ仮

右土音　正詔

應夢山定光寺

當郡村かわ〻臨済宗 本都沙心寺末

源禪師の開基なり 孤峰覚明禪師名八慶安元年十月に生まれ應生二年十三歳にて嵯峨の永和四年勅して覚源禪師と號す妻しの扶桑僧宗傳延宝傳燈録本朝高僧傳を考へ和八壬戌年五月廿八日 國祖君御遊猟の折〻境内の山林及び当郡村の〻と寄附〻り其後捨も此地小市心を留りさとりひらく〻拾貳たまひ〻寄安三年庚寅五月七日ひく

さとりひらく〻び御き命にて御靈柩を当山ふもと〻奉り往傳唱堂導師と奉て山頭小おき免廟壇と建て永く鎮り給へ

もくし

瑞竜院君佛殿方丈等を修補〻ひ寛文三壬寅年五月七日寺領と寄セられ御山内の荘厳他小共にて麓と

なる禪刹なり 名古屋の〻りの共にぴ〻ひ〻格内に入る其入口の左れ山と聖天山と云ふ其山下の共に下馬札あり道の為に駄竜岩あり其の谷川の板橋を駕と常に潺潺〻て手入りなきなり〻る例小格なり〻と〻る其格り東北と〻る〻と〻寺門〻り〻て廣袤あり北の方墓地の中央に石格と宮位墓石塔と〻り〻て此に各ふ墓相老板石在り右の方の高き所に活天神社八幡社わ〻其東の〻と黒山と云ふ山道〻り〻る石壇と天神社と〻り〻て山門

入る墓地の石塔より山門まで 板乃九十五間ありしとか

佛殿

本尊地蔵菩薩小門管作文部擅に地蔵の小像一千体を安置堂の〻りに水閣あり〻て年妙天社方丈書院弘願の東

山門

弘願の西

鐘楼

山門の内東

國祖君御廟

方丈の東の山上にあり二品商亜相尼陽侯源敬公墓と〻り石面金を奉上陳元贅書次四方柵結り西南の〻に拾歳所門〻り柳を浮門〻り小道を分て水〻り内浮門を入て〻り〻り行く浮屋門に向て是〻内の往来いとかりけるいとにはもしかりの例に孤元の人〻の墓〻り寺尼上法寺直政鈴木主殿助重之志水八郎左衛門正路吉之墓石在り高鈴木太兵衛重春の五人又寺尼の墓木新武家仮左衛門段本重之の墓墓馬場太郎左衛門井上法五兵衛志水の墓墓岡田市郎左衛門の四人都合九基の石碑あり〻り

開山塔

弘願の北にあり行基作の千手観音

寺宝

開山覚源禪師の一幅同画像一幅同自賛一幅同禪師画像一幅自賛一幅同禪師画像一幅自賛一幅同禪師画像一幅自賛一幅二世要門和尚画像一幅大覚禪師画像一幅自賛一幅

梅竹軒 書澤軒 織竹軒 夫尚山に登て遠くに眺めれば

蔚然たる松柏林麓の美と為一四時ふまて其色と改変せ〻自然し君子の凋に後るの節操と形一其林の氣雨義を裏て朝暮山間と出や〻霧ふ断の香と競に〻るり考條の後樹さる常小ひ〻げを滴まで苔地も敷て山塵とすて〻られ海さに無垢の清ちるや譬へん

国祖君の尊美永久為に清〻まて御園

定光寺
本よりこゝ
ゆゝ待る
月ハ
高く頃
明洲

四り三十七

の茶と千五百の後の萬歳を保護しまい無上の崇を八千度共
秋小廟食しまいん山い高きにわすれども仙ゐまい名あると劉
禹錫がつくも今爰ふおもひ合され侍る

李悌尾陽亞相
今茲仲夏七日是何日歟如何不淑
尾陽君俄不豫日久遂即世于武江邸林道春二品亞相
無不悲嘆焉而春之送寶櫬于尾州復繫銘於武
江不能奔哭聊樂哀詩一律呈其家臣以慎餘哀
亜相拠永不忘嬉戯孫兵持節
虔致君寺舞見憂嬉紅官室殿顔華動寄鶯儒衣荷
蕃芳浪與梅蕊相共落江城五月慨非涙
源敬文壬寅冬日賜拜水野應章山陳定光寺亜相
公優渡一律
自今日委宮拜有因驍国嵐東情蟠蟻牛蹄闕皆鷺無
豊城白頭一滴聊知波銘使千秋永不磨神野世歌
往歳身為癡崇公廟年宜期今日拜階前金朱輝暉秋雲
映松檜峙嵯峨氣鮮仰穂山峯皆列鏃比恩潭水似
消泉少時伏賜多私感無限清風自奏報

児岩

上平田川村と中石井村の境平田川筋の例かわら一巨岩にて児の立ちかゝりて
居くらしかわらんかいむしいけ川筋の大岩なり此岩の上にて児をうつ舞踊し人を
らーとも云ふ成るべく人刑殺しまいまゝ後世の百と称にまつて長崎ちりしりこと

此わかれ絶名の地うて篠山
曲谷名ふ廟畝の風致いう

蛇洲

まつ川り筋の流間ふ一つ彼大皆がすくもう沼うう

品野村

西如り北山の下の三村ふ一つる山村うう此村の地勢平地すくあく
をくもかすらが彼更科郡の田毎の月にくゝ似ゆ月ひとあるかゝ神にすくの名ゐ
つ山名ゐて更科埴科夢科倉科仁科をつて陸奥ある地うて起して国の名を科を
しるしもしと云

例の里の名あう

品野焼

下石井に竈ゐう本業の後也ゐて瀬戸市陣のみ一幕数
五六ヶ所ありて火浄土鞭とをしめ移くの名と蛟也ゐう

寂場山善提寺

上品野村ふ一天台宗吉根村重点寺ふ天平年中行基井岡創一
ゐう一千手観音の像を作りて安置ゐて一ひ伝へ一ゐう

瑞應山祥雲寺

同村ふ一曹洞宗白坂家真寺ふ天文年中右衛門の城を移井内
寺ふ一三河国桜井郡尾ゐ一ゐ一ゐ一

岩屋堂

中品中村半四郎の支配に係る一巨巖あり俗に岩井堂と云其巖の西山の麓より見たる
の様子方〳〵働きありて奇なり中に出でたる
岩の陰に又一石ありて其大きさ変
く寸あり此時〳〵人ありて人
数多く入て中小荒浮沈を安
全ならんを願ふ堂の称かくの
山水奇観に入る迄甚すか
伏木原の俗に判官の両令
しびて其形狀に岩屋堂の
称稱とす人北陸の海岸
東海の山岳に同型の奇
巖あるも其に寸中の
一寸ならん

歌ひける
石の
ちりうや
方〳〵
迷ふ

不死又何生
不生不復死
生死兩相忘
壽哉箇童子
東慶

兒岩

次信定の孫清定の子小字[illegible]所に尾張方より向城を搆へ日夜攻撃之城主家次甚西の夜敵の油斷を窺ひ不意小子丑半に付城へ取懸る木戸を打破り丸太入る尾兵思ひもよらぬ大ふ驚き騒ぎ或ハ同士討し或ハ柵を越て逃出り因て尾軍の渠帥竹村孫七郎殘四金平戸崎平丸郎滝山傳三郎をしめ五十餘人討死其外悉く向城を持て退去り此義元家次が軍功と褒し感状を給わる

[illegible]村の西北に古城址一所有り蒲下の城と云ふ永井氏郎少輔居住[illegible]

雲寺に位牌わり長江氏郎[illegible]

因人の別人の祝寿[illegible]

雲見ヶ峯　因村の東の[illegible]三河の國界にあり[illegible]四方の眺望たぐひなし一説に[illegible]

平雅連ヶ岳小井[illegible]

[illegible]

三國嶺　因村と片草村の境雲見ヶ峯の北にあり[illegible]三河の加茂郡美濃の可児郡に接して頂上に三ツの石あり[illegible]國界の標[illegible]國中の高

三國峠
雲見ヶ峯
乘鞍石
谷ほとゝぎす
宗州人乃
いろをれハ
春秋の
旅に
乃ハ有ケり
綱根
四ノ四十一

蒼山の
すゝ侍
秋月て
秋の山
静夏

山うて頂より四方の眺望ふかんすれば一山躑躅多くして其花未花の頃い見事なれば遠路も絶ず深山うて多く稀なる情ひべきの甚しきかな

此山へ行ん美濃国西沢村より登るとも乗合とこれ香江上ふ地ゆうて紫色を帯び谷の清き方にひたすらとして所に大なる清水あり流れ日夜をあらひ洗ふ山の水の寒冷多清水佳なり

○敷鍬石に付て

巨石おのおのすなわち石の方の山の日光嶽鍬石あり方一丈五枚岩ゆ山を為のかりにかりて出るれひ山所ゆ山所ゆ鍬鍬を閉て方一丈ばかりの石の上に尾張三の山ゆ三河国ゆ遠ゆ国ゆ石に足跡あれ千里の隔たれ所ゆ

社記ゆ又甲人の技に天乱清朗ゆ日ゆ社ゆ塩ゆ人ゆ石小谷の蹴ゆ出ゆ国にあり三州市場たの方

白川ゆ年の冬ゆ濃州大ゆ利ゆ戌の方神ゆ丑寅の方ゆ巳ゆ酉戌の方ゆ

大竜山雲興寺

赤津村にあり曹洞宗 三間村西眼寺末

後永七庚辰年天鷹祖祐和尚の創建ゆ和尚ゆ越前の永平寺七世の住職ゆ方ゆ西玉下津の正眼寺の住職ゆ隠退ゆ志ゆて山水幽僻の地と撰ミ白坂赤津の東に高松山毘沙門堂の古刹ゆ地を見三一宇の草庵と結び毘沙門山高松寺と名づけ翌年火に焼ゆ其地も狭く衆と咎

ゆに便りゆ甚ゆ瞰戸赤津の村民頻に請待ゆ見ゆ易地して今の所ゆ移ゆて祖祐和尚開堂の日大竜形ゆを現ゆ瑞雲と起して祖祥をあり

ゆ是ゆ今の山号寺号ゆ

○本堂

本尊釈迦如来本堂の前ゆ方ゆ

禅堂衆寮書院庫裏蔵鐘楼總門多宝塔ゆ竜眼池

本堂の前ゆ方ゆ三代天鬼和尚の代青水の神人来ゆ我ゆ此山造ゆ後者為ゆ此山の形ゆ竜の蟠ゆ方ゆ一池ゆ眼ゆ為ゆ山眼ゆ此ゆ井ゆ清ゆ出ゆ水ゆ涸ゆ無ゆ二十五年戊戌七月十二日の池ゆ方ゆ竜の面眼ゆ撰ゆ清ゆ出ゆ人ゆ汗ゆ人ゆ河の鎮護大明神

性空石

鬼門の和西南の水陸ゆ方ゆ人ゆ方ゆ人ゆ方ゆ人

門前
鐘楼
本堂
開山堂
庫裏
鐘楼
田
田
開山石
雲興寺
望ふのみむしゝ
佛のちゑもて
さむるてゝや
ちるもみぢゝ
義成
さゝふ為く
云のちゑの
自おうめ
主明

雲興寺
門前翠竹至頭山
古斯禪林第一關
惟有白雲便榻下
曉天出岫暮天還
僧畫屏

山ノ内見ヒ石
葛籠岩

此五物叢々
人呼為九州
取形將取敵
吾未得其說
梅軒
元亀二年
涼風さそふ
涼れ
我竟
三ツ石
ヒツ石
西石

[illegible]

龍天水 [illegible]

経塚 和尚の新彦七一代本堂の前に二所あり[illegible]

座禅石 寺の東のさにあり

鏡守社 山の[illegible]

萬董石 寺の東の上に有り四方[illegible]

寺領 附あり[illegible]

寺宝 菅公御自筆[illegible]

塔頭 大愚軒

毘沙門峯 名づけ[illegible]

戸越 毘沙門山の[illegible]

赤津焼 [illegible]

大目神社 同村にあり今八王子と称す 延喜神名式に大目神社本國帳に従三位大目天神とあるこの官社なるべしこの社号も失てこの地を大まかに求しい御守塚なり嵯峨[illegible]が天保十年十月[illegible]神宝等を改めしに内陣中央の上段に清正朝臣の印の清名あるつて安置奉り沙宝多くあり[illegible]中に本國帳の古写色あ一色[illegible]物あり大目八王子大明神御神前天和三年癸亥正月廿二日祭主敬白とあるなりこれにて[illegible]式内の神なる事と為まり[illegible]

関尾山万徳寺 同村にあり高田宗伊勢一向専修寺直末老分庫と称し[illegible]

当ちい正徳年中の創建[illegible]

[illegible]

鐘楼
経蔵
玄関
大師堂
書院
本堂
薬師堂
観音堂
鐘楼
山門

萬徳寺
月庵

京下総守廣長宣貫四百文の田地を尚もに寄附す今も其於之

寺宝しるし○本尊　西條院の御本尊　太子堂　聖徳太子像鳥佛師作

寺宝　聖徳太子傳記五巻奥書曰右此傳者井田橋山門不出之秘書也欲四天王寺

有響約之儀密写了時寛正三年壬子孟夏吉日筆者沙弥乙恭敬之尾州山田郡内郡津

信筆　[illegible]

竜淵　山口川の上流うて水源は三州か武郡より おつ川の西巻より巌

石でゝ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

龍淵
青柳

此滝ハ山口川の支流ふ
わくゝ東関うふの方
東へ八ちふ橋をうゝり
りゝ多井林寺ヲ一て
惟果院と主さんがゝ
うえに奇岩怪石の岩を
飛流ちゝ多滝の下流へ
やゝ十町ハ左ヘ折ゝさ
所に滝ありて瀑流する
さま又見ずゝ

三里青松白石碧水漲波沿流而行水益大山益深松益碧石益奇猛犀駭山驟馬欲水巨龍蔵松以外黄蘆鳴草而未行列巖似萬折屏風絶壁知數里步障忽然大巖壁裂懸流雷鳴渺空巖腹而四注上有天物之吼下有神竜之潛〻者難測其變吼者不可見其形是竜淵之勝也先生嘉往觀之乎於是西子三月十七日往奇景隨歩而生所見驚於所聞皆怒山人説之曰余曰何見全形至龍淵隅溪仰高巖俯幕中隱〻見二行八分大字傍有小記惟而視之即山人書也初山人之師三橋翁在日常愛此地欲鑱字于懸巖上未果山人述其遺志請恩田先生記之也嗚呼小山人之志如石故遂得為之事之不朽雖然及之美哉深山易昏晦故三盡熟淌各題一詩而歸是日也山人及釋寂蘊藤歸責生作因生雪遊之腹有形木一掃而成其巖字別有渴本故不詳載淵巖上詩

龍德　尾頭備題竜淵　僧　関尾

不測與世推遷昔題鵞空　今　潛護淵

尾頭備の竜淵の巖上に詩を附せんとて

名産瀬戸磁器　道直

名産瀬戸磁器

世語にも拵ぬその名付けそのゐるなる窯の跡

瀬戸村に陶工多くあり。皿茶碗茶壺をつくりつくるの素物を焼かんが為に瀬戸半腹のたびひ寺津村まで他出りもとて諸国に売をもとりて味初りやすく器物の出来るとあり。

作ニ陶器ヲ云ル神ニ瀬戸物ノ事ハ今ハ瀬戸村の

延喜式踐祚大嘗祭

の条ハ尾張國所造甕八口缶五十口笘坏四十口甕八口瓮十口短女坏三十三口酒甕八口匜十六口片坏四十口陶臼八口餙甕八高盤四十口坩十二口都婆波十二口酒盞十二口酒缶八口ト云ふ〜日本後紀の残缺に弘仁六年正月丁丑五日造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙麿等三人傳習成業准雜生聽出身〜尺弘仁式ハ應供神御由加物所司具注所須物類預前申官八月上旬差宮内省史生遣五箇之國造河内和泉一人尾張參河一人備前一人到國先祓而後造作焉ト云ふ〜

（その田加物ハ延喜式の神祭の條に雜器者日曲物もの云ふしをあるなり陶器ハ瓷器の誤ル）

ま〜延喜民部式の年料雜器ハ

うちに尾張國瓷器大椀五口徑各九寸五分中椀五口徑各七寸茶小椀徑各六寸椀廿口徑各五寸盞五口徑各四寸七分中摯子十口徑各五寸小摯子五口徑各四寸五分花盤十口徑各五寸五分花形盛坏十口徑各三寸醍十口大四口小六口〜ハ〜ハ〜ハ

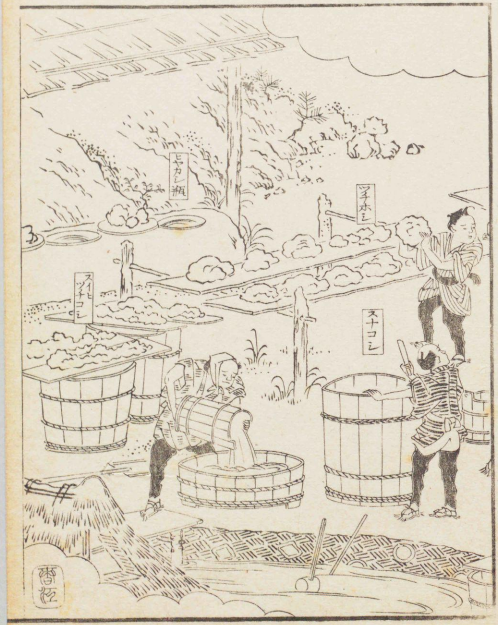
母い平道風が女なり（山城国深草の人）成人の後久我大納言通親卿ゟ仕へ五位の諸太夫ゝなる名と景正と云り春慶（或は後慶とも春景とも云ハ別号なり深草の里ハ母の居住なるが故ゆゑ所ゟ住く土器を製し試るゆゑ其業に委しく侯況茶を用ふる法を初て深草焼土器を造るゝ高麗南京其外の焼物を集めいふり〻斯る器物を製せんと朝暮心を砕くゝ人も其侍を得ざるを患ふるに越の永平寺開山道元禅師ハ通親ゟの二男なり〻

後堀河帝の貞應二年入宋の志あるよゝと聞ゆゑ此人ゟ宋へ入宋を（一説に左四郎景正ハ前法を経四一南宋御戸ゟ来る中四家焼院にあるゝ来老ゆるゝハ左四郎事に師と走り此時ゟ陶器を製造せり或説道元禅師に従ひ入宋せりとも云）此時宋朝ハ寧宗帝嘉定十六年なり夫より彼地ゟ居ること年の多南京北京其外國〻を経四一陶器製作の秘奥をきはめ又禅師ゟ随て安貞二年の春帰朝す此時廿六歳なりかくて肥後國川尻

益聞　頃梅帝之世有加藤四郎春慶者尾州智多郡人也或言春日井郡御戸村人人言泉州堺氏　皇都之郊洛州里産其料不可得而識矣好造陶器常恨出土陶法未審焉乃偏中意縁遇之宋春慶以為銀且遂隨行遊宋五年宋陶人之家語者為良工遷移数十屋過覧及承教諸川而異好造窯器後居御戸村創祖母懐之地所土粘弗敢望弗沙且朱鈴之彼異于他邦無美御戸之物益似其造乃極髮入造有絵馬之志其付社中手造御子屋鎧一隻厚斯今五百有餘家的有陶姓出春慶手則五数百余大海為至公貴人砌庫之物大春歎者使人繼其聲者作者使人紹其功春慶之緒業其唐銭乎君子之道真尤源之地以陶礼食以加藤姓者皆見為陶長　大海給諸加藤春暁者世不絶学元諸陶氏所造出大小巨萬杯聖之類乃日用必需之物草通古東通東無斯京都南聖王于接桃園器曰瑞産物造矣歟春慶之緒譬曰坏治一陶群生得計春慶之業者為可謂後人永食之数百家西世引之無替以給旦夕之用者弗怠之歟

安永八年己亥九月十五日　人見春

陶工加藤春慶像
古今東市翁所望　藤原時春像之圖
春江繪摹


石カヒ瓶
マイホヒ
スイトコレ
スイトコレ

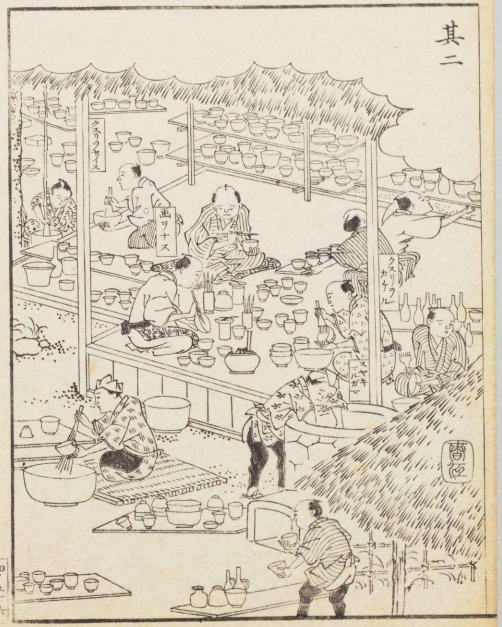
瀬戸陶器職場之一
本業深付焼の一様なれど
職場のうち丸ハ大用小異
もう丸ハ古人石筆の
図ハ其ゝ倣して画く
マイコ子
マイコ子
マイホヒ
マイアハセ
マイトウチ
スイトコレ
四ノ十四

の窯ありふ着船せらば先此所ゟ小さ窯を作りて彼地より持来
たりしを元にして小壺三ツ造り其後小最勝寺ゟ時の將軍
家又祿所ゟも奉る（今世に祿所と名あり）夫より父の死所備前国松尾
ゟ到り暫くこゝゟも陶器を作り其後濃尊寺の里に移りぬ
さて程なく母ゟ有りなれば是より陶器ゟ分べきと云
むと泉州堺江州彼州濃州各藩郡野口村尚ゟ知多郡半
月村愛智郡末森村等にて焼試むと云へども いまゝ心ゟ窓せん
故ゟ終園中山野を巡り見るに山田郡瀬戸村の山祖母懐と云
所に山高くして谷深く水清浄ゆて陽ゟ向ひ土色も他ゟ異し
て座あり特承りしに古に唐人事多れば諸州無双の好土なり
藤四郎 系貌一名ゟ も教る器物を造ん事をうるに成れいゝゟと云に多く話
代ゟ祭りて云後て竈屋敷ゟ及び又祖母懐のゟ他ゟ異を移て焼ざりしと云に多く話
住居の所ゟ有も瀬戸村に移るあゝ源川神社の祭礼と鯉と外に盆まつりのしるう
今も古竈跡を移り此地に移りて窯ゟ多あり窯跡の多くも及ばゞ焼ゟ成ゟ以前へ

今に美のして器物の名に成ぬ
入ぎり一成多く焼物ゟ成ぬ

藤四郎が宅址は深川神社辰巳の方田圃
中島と云所ゟ有り（今移一株）又是より北の方に禪長菴と云字
ゟ有り其ゟ藤四郎老年ゟ及び男藤五郎に世を譲て後閑居
の地なりと云山下に比丘尼窓と云ゟ有り藤四郎が妻の居住
なる所と云ひ伝ゟ（古今名物類聚に藤四郎唐の土と某を学ぶ始て初て尾
州瀬戸に移り住て後ると唐物と移し焼ゟ其ゟ古物ゟ古瀬戸と云ゟ是ゟ
古瀬戸と云ゟ瀬戸ゟ出来ゟ故ゟ大形の四来ゟ故ゟ大瀬戸と云ゟ是ゟ
唐ゟ瀬戸ゟ元亨年間ゟ手猫出ゟ手と云ゟ大名物古瀬戸唐ゟ有り瀬戸ゟ唐ゟ
ゟ有りのゟ漢と云ゟ是ゟ世ゟ世ゟ尾ゟ有し隠ゟ云ゟ珠ゟ一ゟ云ゟ一窯土
中に黒ゟ有り）と後に藤四郎ゟ有り一説ゟ尾州公時代に藤四郎ゟ有ゟ
入唐ゟ前の作ゟ出来ゟ此夫ゟ て十作に又ゟ有り古瀬戸観ゟ有ゟ
成ゟ有ゟ窯の内ゟ て火気ゟ て焼ゟ て上ゟ出来ゟ故ゟ藤四郎ゟ後窯の上ゟ
藤四郎作を真中古物ゟ云ゟ二代目ゟ ゟ 元祖ゟ古瀬戸ゟ称ゟ二代
目ゟ藤四郎ゟ称ゟ同名二人ゟ て ゟ ゟ 二代目ゟ藤四郎ゟ
ゟ二代目ゟ三代目ゟ次郎ゟ是ゟ中古物ゟ云ゟ今華山窯の作者ゟ一代目是ゟ
中古物ゟ云ゟ故風窯ゟ有ゟ美ゟ云ゟ故風窯ゟ有ゟ
と云ゟ渚ゟ有ゟ伝ゟ何人ゟ美ゟ を詳ゟ ゟ 又後時代春愛と称ゟ
春慶ゟ ゟ ゟ 元祖藤四郎ゟ ゟ 祖ゟ ゟ 是ゟ ゟ 正信
美愛ゟ不詳ゟ ゟ 代目藤四郎ゟ 志摩崇徐の聖ゟ ゟ 名を正信と云ゟ
正信春慶ゟ伝ゟ の系入ゟ 上作ゟ ゟ ゟ 外是藤四郎 柳藤四郎系目
藤四郎 刷毛目藤四郎ゟ 和漢茶入譜ゟ及ゟ ゟ 藤四郎の美ゟ ゟ 名

ハイ
ホカ・カス


其二
画フナス
クスリフケース
ハイ
クスリフル
ヘイ
ヘイ
ヘイ
四ノチヤヤ

[illegible]ゝり源を[illegible]ゝ[illegible]元祖藤四郎をゝじめ歴代の傳説陶工家ゝ[illegible]ゝし世ゝ傳へ
なるゝゝゝ大司ゝ異ゝりて一定しゝゝ今渚説をとりて折衷して
ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

其三

焚休む
かまどのちや
それ月
卓池
小竜を
とのあと
焼てえむ
好有

六作十作の事

永禄六年信長公國中巡覽の節瀬戸少し久家右作しつを賞し
中山まさ天正十三年古田織部正重勝名家十作と之を定り降其
名家を定られ此の六作十作のうち本文の通り今の名家の系譜を
まさ一流に吉兵衛 新兵衛 江巻 京日 長右衛門 源十郎 ○宗右衛門 口市右衛門

六作

太長十 丁新兵衛 ○後白 十長兵衛 可宗右衛門 口市右衛門

十作

七平七 廿六兵衛 山吉右衛門 七治兵衛 力八郎二 の一佐介 一元蔵
○友十 田金九郎 イ丈八

祖母懐土

田村原巳の方にあり陶土の用ひて能わの土あり今官禁しうり祖母懐土と
伝へ云る四郎ヶ祖母武門山住を足迹ある地回しゑ所を得懐土ゆ
所に名づくしゑ云ひいあり此所に祖母懐の土の由所のうちに所うる
ゆ然る云ふ武設に祖母懐土の名ふり伝地名ようり神玉集に載る古竈のうちに祖母
懐竈はずとしゆ懐しゆ上作竈ようしし記て毎ゆ八四郎ようゑ土助ようゆ地名を
名ふ名ゆ一の之

古窯跡

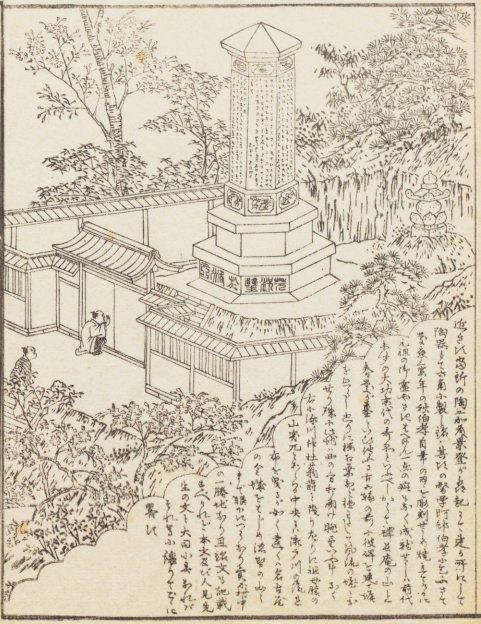
田村の山林西ゆ焼きしゆ所にあり美濃四郎窯しゆ仲ゆ
寺宮窯 禅長寺窯 朝日窯 細倉窯 古瀬戸窯 源氏窯 三代目鬼四郎窯 藤兵衛窯 峯の神窯
〈ハ 獄田窯 南洞窯 板屋窯 窯原窯 松留窯 保天窯 水晶窯 藤兵衛窯 大垂窯 ゆ大垂窯 ゆ大垂窯 山脇窯
ようゆ 紐外の屋根窯 窯原窯 松留窯 保天窯 水晶窯 藤兵衛窯 大垂窯 ゆ大垂窯 ゆ大垂窯 山脇窯
所 遠土神 〈ハ 〈ハ 〈ハ

南所ハ東南北ハ山嶽連り中央に瀬戸川流れ村落ハ点在して山傍ハ多く

北新岡南新開宮脇点郷点 一村農商ハ陶工に多く家居も他村

河内ハ点在 ハ点在 ハ点在

陶祖加藤春慶碑銘


陶祖加藤春慶碑銘
春慶

其ものすがたを高院主い宝暦年中より数て高代まで三世と称する遠州秋葉山（月森の雅行と勅び既小安政の今に為り千修安の多りを思ひ秋葉山の空前に月森の奉願わうて世人おまわく与の所今り

尾張名所圖會後編巻之四畢

302889

A294

~~1291~~
オ
1A-2-4

四ノ六十三

愛知県
1103263977
294
才
1A-2-4